

ブラームス: ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op.77 (約38分) ★

Johannes Brahms: Violin Concerto in D major, op.77

第1楽章 アレグロ・ノン・トロッポ

Allegro non troppo

第2楽章 アダージョ

Adagio

第3楽章 アレグロ・ジョコーソ、マ・ノン・トロッポ・ヴィヴァーチェ

Allegro giocoso, ma non troppo vivace

………… 休憩 (20分) Intermission ………

ブラームス: 交響曲第1番 ハ短調 op.68 (約45分)

Johannes Brahms: Symphony No.1 in C minor, op.68

第1楽章 ウン・ポコ・ソステヌートーアレグロ

Un poco sostenuto – Allegro

第2楽章 アンダンテ・ソステヌート

Andante sostenuto

第3楽章 ウン・ポコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ

Un poco allegretto e grazioso

第4楽章 アダージョーピウ・アンダンテーアレグロ・ノン・トロッポ、マ・コン・ブリオ

Adagio - Più andante - Allegro non troppo, ma con brio

指揮: カーチュン・ウオン

Kahchun Wong, Conductor

ヴァイオリン: 神尾真由子 (★ 演奏曲)

Mayuko Kamio, Violin

管弦楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団

Hyogo Performing Arts Center Orchestra

※演奏時間は目安です。前後する可能性がありますので、予めご了承ください。

ヨハネス・ブラームス(1833-1897)は19世紀ドイツの作曲家で、音楽史の上ではロマン派後期とされる時代に活躍しました。イメージとしては何となくベートーヴェンの次世代ぐらいの感覚を持つのかもかもしれませんが、ベートーヴェンが亡くなった1827年には、まだブラームスは生まれていません。これはブラームスの音楽が保守的で古風だとされることにも関連しますが、確かにそういった要素もあるものの、決してブラームスは懐古的な後ろ向きの音楽を書いていたわけではなく、古典的な造作に敬意を払いつつも、19世紀後半に特有のロマンティシズムをたたえた音楽を生み出していました。

ブラームス: ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op.77

Johannes Brahms: Violin Concerto in D major, op.77

ブラームスは4曲の協奏曲を残しました。「ピアノ協奏曲」が2曲、そしてこの「ヴァイオリン協奏曲」、さらにヴァイオリンとチェロの「二重協奏曲」というものがあります。これらについてよく言われてきたのが「独奏付きの交響曲」ということでした。つまり、独奏者は単に名人芸の披露にとどまらず、オーケストラは独奏の伴奏というわけではなく、お互いが丁々発止のやりとりを重ねながら音楽を創るということになります。

《ヴァイオリン協奏曲》は1878年(45歳)の夏に避暑地ペルチャハで完成された作品。この地には前年の夏に続いての滞在でした。後半に演奏される《交響曲第1番》の完成からはわずか2年に満たないのですが、音楽の表情は随分と異なります。前年の夏には開放的な《交響曲第2番》を一気に書き上げ、まさにこの時代はブラームスの「傑作の森」とでも言うべき充実期でした。

20歳になろうとするまだ無名の作曲家であった時代に出会った親友のヨーゼフ・ヨアヒムの存在無くして、この作品のことを語ることはできません。ブラームスは「ヴァイオリン協奏曲」を書くにあたって助言を求め、経験豊かなこの名ヴァイオリニストの判断を仰ぎました。ただし頑固なブラームスはヨアヒムの指摘に耳を貸さなかったところもあったそうです。1879年1月1日にライプツィヒにおいて、ブラームス自身の指揮、ヨーゼフ・ヨアヒムの独奏で《ヴァイオリン協奏曲》は初演されました。

3つの楽章で構成されます。〈第1楽章〉は冒頭こそ伸びやかに始まるものの、独奏ヴァイオリンが登場する以前にオーケストラの演奏は熱を帯び、音楽は構築的に連ねられます。〈第2楽章〉は甘い主題が魅力的で、もちろん独奏ヴァイオリンでも奏でられるのですが、冒頭からオーボエが吹く凛とした美しさも魅力的です。〈第3楽章〉ではブラームスが得意としたハンガリー風のリズムも盛り込んで、情熱的に切れ味よくフィナーレを形成します。

楽器 編成

独奏ヴァイオリン、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、
バスーン2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

ブラームス: 交響曲第1番 ハ短調 op.68

Johannes Brahms: Symphony No.1 in C minor, op.68

ブラームスは4曲の交響曲を残しました。《交響曲第1番》は着想から20年もの期間を経て完成されたのですが、なかなか最初の交響曲を書ききれなかった理由はベートーヴェンの存在が大きかったと考えられます。

ブラームスだけでなく、この時代の作曲家にとって半世紀前にベートーヴェンが書き残した偉大な9つの交響曲を前にして、何を書くのかは大問題でした。もっとも第1楽章の主部などは早くから手掛けられていたものの、これだけ長期にわたって作曲を継続していたということではありません。「20年かけて」とはいえ実際の創作は中断されたままで、本格的に作曲が進んだのは1876年(43歳)になってからでした。それでも、なかなか交響曲を完成できないということはブラームスにとって、喉に刺さった小骨のように心に引っかかっていたに違いありません。

この頃はちょうどブラームスの社会的な名声も高まっていた時期に当たります。彼の最初の交響曲への期待も膨らんでいました。その一方、世の中では様々な作曲家によって次々と交響曲が書き上げられていました。ブラームスがドヴォルザークのことを知って激賞したのは1875年のことでしたが、その時点で8歳年下のドヴォルザークはすでに5曲の交響曲を作曲済みだったことになります。

1876年秋にウィーン近郊バーデンバーデンのリヒテンタールでブラームスの《交響曲第1番》は完成し、11月4日にオットー・デッツォフ指揮のカールスルーエ宮廷管弦楽団によって初演されます。その後、ヨーロッパ各地でこの作品は演奏されましたが、その評判は様々でした。堅牢な構築性の評価は概ね高かったのですが、旋律的でないとされて、取っつきにくい音楽と受け止められたようです。ブラームスが何よりも重視したのは、ベートーヴェンがその方法を極めた動機労作でした。つまり小さな素材を徹底的に展開させるわけですが、そのことで堅苦しさも生まれたわけです。確かにこの音楽からは、肩を怒らせた物々しさが伝わってきます。まさにそれこそがブラームスの決意表明でもありました。

4つの楽章で構成されます。〈第1楽章〉冒頭の序奏がまさにその決意表明たるこの曲のトレードマークとなる部分で、雄渾に撃ち込まれるティンパニ

の歩みが響きの色合いを定めます。〈第2楽章〉はロマンティックなメロディがオーボエ、クラリネット、独奏ヴァイオリン、ホルンと受け継がれて奏でられます。〈第3楽章〉はきめ細やかに綴られた調和した世界。〈第4楽章〉は巧妙にお膳立てされて、見事なクライマックスが形作られるフィナーレになりました。フルートやホルンで息の長いメロディが奏でられ、歌舞伎で大見得を切るように、「待ってました!」と掛け声をかけたくなるようなフィナーレです。もちろん、今は感染症を食い止めなくてはなりませんので、声を出すのは心の中でお祈いしますね。

楽器
編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、
コントラ・バスーン、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、
バス・トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部

※この公演の録音・録画・撮影および、そのための機材の会場内への持ち込みは固く禁じられています。
※音や警報音の鳴る機器(補聴器、アラーム付時計等)をお持ちの方は、上演中音が鳴らないようご注意願います。
※客席内では携帯電話は使用できませんので、電源をお切りください。
※演奏中の会話、客席内でのご飲食はご遠慮ください。

新型コロナウイルス感染拡大防止対策に関するお願いとお知らせ

●必ず指定されたお席でご鑑賞ください。●ご鑑賞中も、常にマスクをご着用ください。(マウスシールド不可) ●ブラボーなどの声援や、大きな声での会話はお控えください。●途中で退出されますと、ご自身のお席へお戻りいただけない場合があります。●終演時は、分散してのご退場にご協力ください。●客席内は、強制換気システムにより常に外気との入れ替えを行っております。

当センターウェブサイトより、アンケートへのご協力をお願いいたします。

右記QRコードを読み取って公演カレンダーへアクセスしてください。(公演翌日から3月20日まで)



「兵庫県コロナ追跡システム」をぜひご利用ください。館内掲示のポスターよりQRコードを読み取ってご登録ください。